# 第三章　文　字

## ■“消えない言葉”を求めて

『聖書』に「初めに言葉ありき」とあり、続いて「言葉は神なりき」とある。この表現ほど言葉の偉大さを見事に表現したものは他に無いのではあるまいか。

然し、この“言葉”といふ言葉は、私たちが普通に言ふところの言葉ではない。「言葉を言葉たらしめてゐる“思想”」であって、それは「発音を必要としない言葉」である。

すでに前の章で述べて来たやうに、言葉は“思想”が本体であって、“発音”はその容器である。思想は“精神”とも言はれる。精なる神である。だから、「言葉は神なりき」

と言ったものであらう。

鸚鵡（おうむ）や九官鳥は「お早うございます」と、言葉らしいものを言ふことが出来る。しかし、それは“発音”があるだけであって、言葉の本体である“思想”が存在しないから、いくら“言葉”のやうに耳に聞えても、決して“言葉”とは言へないのである。

さて、私たちが今使ってゐる日本語だの英語だの中国語といふやうな“言葉”は、人類がこの世に誕生してかなり長い年代を経てから、その生活上の必要により徐々に作られ、ふえて行って今日に及んだものであらう。

この“言葉”は、第一章で述べたやうに、人間だけに許されたものである。無数に存在する生物の中で、ただ大脳が巨大に発達した人間だけが言葉を覚えることが出来、言葉を使ふことが出来るのである。つまり、人間はその大きな大脳のお蔭で、言葉を覚えることが出来、その言葉の力により霊長となることが出来て、万物の上に君臨することが出来たのである。

然し、この素晴しい“言葉”にも欠陥があった。それは、発生するや否や“消えてしまふ”といふことであった。とりわけ大切な言葉は保存して置きたいと思っても、その保存は出来ないのである。また、伝達の範囲も、声の届く所に限られる、といふ制約も欠陥の一つであった。

だから、人類は、言葉を作ってその偉大な効用に預ってからは、時間的にも空間的にも制約のあるこの“言葉”を、いつ、どこででも受授できるやうにしたい、といふ願ひを懐（いだ）くやうになったものと思ふ。

然しながら、その願ひは、数十万年にわたる人類の強い願ひであったのにも関はらず、なかなか果すことが出来なかった。それで、頭の中に保存するほかは無かったが、

保存したい大切な“言葉”は世代を重ねるにつれてふえる一方であったから、それも次第に困難になって行った。

そこで、権力者たちは、どんなに多くの言葉でも頭の中に貯へて置くことの出来る、そしてそれを専業とする職業集団を作り、その人たちの頭の中に、いく世代にもわたって、大切な言葉を蓄積させて行ったのである。わが国の最も古い記録である『古事記』が、かういふ職業集団である“語り部”によって語り継がれ、蓄積されたものであることは衆知の通りである。

然し、人類は遂に「言葉を保存する方法」の発明に成功することが出来た。それが「文字の発明」である。文字は、言葉を目で見るものにしたものである。だから、耳で聴く言葉の“聴覚言語”に対して、“視覚言語”と呼ばれるわけである。

言葉が文字で表現されるやうになると、いつ、どこでも、欲するままに自由に受授することが出来るやうになり、人類は文字を使ひ始めてまだ五千年ほどにしかならないのに、言葉しか使へなかった人類が数十万年もかかって成し遂げた事の何十百倍もの仕事をすることが出来たのである。

## ■世界最初の文字

人類最初の文字は、紀元前三三〇〇年頃、今のイラクにある、チグリス川とユウフラテス川に挟まれた地域に住んでゐたスメール人によって創作された。スメール人は、人類で最初に定住し、農耕することを始めた民族である。然し、スメール人は、その後間もなく世界の歴史から永遠に消え去ってしまふが、恐らく繁栄の極に周囲から侵入して来た蛮族によって亡ぼされたものであらう。

スメール文字が発明されておよそ百年後に、エヂプトで“聖刻文字(ヒエログリフ)”と呼ばれる文字が発明されてゐる。この文字は、エヂプト人が自ら作ったものだと思はれるが、恐らくスメール文字がエヂプトに入り、これに触発されて作ったものだらうと私は思ってゐる。

漢字の創作が、もしも一般に言はれてゐるやうに殷王朝であるとするならば、紀元前一五〇〇年頃の事と思ばれるから、スメール文字の発明からは実に千八百年も後の事になる。この長い年月の間に、シルクロードを経てスメール文字が中国に伝はらないわけがないと私は思ふ。だから、漢字も、スメール文字に触発された中国人によって作られたものであらうと私は思ってゐる。

また、一九二二年に発見されたインドのインダス川の流域にある、モヘンジョ・ダロやハラッパーの古代遺跡は、少なくとも紀元前二〇〇〇年以前のものと推定されてゐるが、ここから出土した粘土板の絵画文字も、スメール文字に触発されて作られたものである、といふ考へ方が学界では有力である。

だから、漢字の発明も、スメール文字が、あるひはインダス文字が、シルクロードを経て中国に渡り、これに触発されて中国人が作った、と考へるのが至当であらう。それにもう一つ大きな理由がある。

漢字の構成法として、古くから“六書(りくしょ)”と呼ばれてゐる“象形・指事・会意・形声”の四つの構成法と、“転注・仮借”の二つの用字法のあることが広く知られてゐるけれども、それと全く同じ六つの用法がスメール文字にも存在してゐたことが明らかに認められるからである。

勿論、同じ人間が考へて作ったものだから、漢字の構成法がスメール文字と全く同じだからと言って、それがスメール文字の影響であった理由にならない、と言へば言へな

いことはない。然し、それにも関はらず、私は、「漢字はスメール文字に触発されて作られたものに先づ間違ひはない」と思ふものである。

## ■スメール文字の影響

「人類で最初に定住し、農耕を始めた民族はスメール人であった」と先に述べたが、それはいつ頃かと言ふと、「今からおよそ八千年前の事」であると推定されてゐる。この、長期にわたる定住・農耕といふ安定した生活の中から、“文字”が初めて誕生したのである。

今から八千年も昔に、スメール人は優秀な磨製石器や彩色土器、粘土像などを製作してゐて、安定した生活を営んでゐたことは、その遺物から十分に推察できる。その安定した生活の中で、二千数百年といふ長い年月を経て、“文字”はやっとこの世のものとなったのである。文字の発明がどんなに大変なものであるかといふ事は、これだけの事を考へてみただけでもよく解らう。

然しながら、スメール人によってひと度文字が作られると、その影響は、比較的短日月のうちに周囲の民族に及び、その文字を借りて自分たち氏族の言葉を表すか、または、エヂプトやイソドや中国のやうにすでに高度の文化生活を営んでゐた民族は、それに触発されて、それを参考に自分たち民族の言葉を表すための文字を作ったもののやうである。

然し、真似にせよ、文字を作るといふ事は至難の業であると見え、スメール文字に触発されて自分たちの文字を創作したものは、エヂプト人とインド人と中国人だけであった。人類の長い歴史の中で、広いこの世界の中で僅かこれだけである。

だから、スメール文字に触発され、それを手本にして作るにもせよ、「自分たち民族の言葉を直接表した文字」を作るといふ事は、よほど高度の文化に達し、安定した社会生活を営んでゐなければとても出来ない、大変な事業だといふことが解る。

たいていの民族は、自分の力ではとても創作することが出来ないので、先進国の文字の一部を借りて、それをそのままそっくり用ひるのが普通であった。その“借りる方法”といふのは決ってゐて、どこの民族を調べてみても一つの例外もない。その方法といふのは、六書で言ふ“仮借（かしや）”である。

## ■仮借＝表音文字

“仮借”とは「仮に借りる」といふ意味の言葉であって、「既製の他民族の文字を、その本来の意味に関係なく、その発音だけを借りて“表音的”に用ひる」といふ用法を言ったものである。

子供の遊びに、蟻と蛾と塔の、三つの絵を並べて置き、これを“有難う”と読ませる遊びがある。この場合の蟻や蛾や塔の絵は、その意味に関係なく、ただ“あり・が・たう”といふ発音だけを頼りに“有難う”といふ言葉を想起させるものであって、これを絵でなく文字で行ったものが“仮借”なのである。

そもそも文字といふものは、直に消えてしまふ言葉を保存するために創作したものであるから、一字一字、言葉に対応して作られてゐる。だから、文字は、言葉が有つ“意味”と“発音”との両面を備へてゐるものである。

それで、文字を有たない民族が、先進民族の文字を借りて自分たちの言葉を表すためには、理論的には、「意味の方を捨てて、発音だけを借りる」か、「発音の方を捨て

て、意味だけを借りる」か、この二つの方法が考へられる。

然し、理論的には二つの方法があっても、現実には例外なく“前者”の方法が採られてゐて、この方法が“仮借”と呼ばれるものである。

では、なぜ“後者”の方法が採られないのであらうか。それは、“前者”の場合は二、三十字の文字を借りれば足りるのに、“後者”だと二、三千字にもなるからである。それなら借りるよりも、自分で作った方がむしろ楽であらう。エヂプトやインドや中国の場合、スメール文字を借りないで、自分で作ったのは、借りるよりも作った方が楽だといふ計算があったのだと思ふ。

先に「言葉は思想が本体であって、発音はその容器である」と述べた。だから、文字においても「思想が本体であって、発音は容器である」ことは言ふまでもない。だから、仮借は、言はば“容器”だけの存在である。容器の形からその中に盛られた思想を捜り出さうとするものである。

それ故、仮借は本当の文字とは言ひ難いものである。「仮に借りる」と言ふわけである。ところが、西欧の学者たちは、この仮借に麗々しくも“表音文字”といふ名称を与へ、しかも、文字の最も発展した姿だと讃へてゐるのである。

然し、自らの力で文字を作ることが出来ず、よその文字の容器だけを借りて来て、最も安易な形で済ませようといふ用法である“仮借”に、どんなに立派な名前を付けたところで立派になるわけのものではない。大事な思想を欠いて、発音しか表すことの出来ない“表音文字”は、“仮借”といふ名称が最もふさはしいのである。

## ■表音文字の正体

ここで、表音文字の正体を徹底的に明らかにして置かうと思ふ。

西欧の言語学者や文字学者は、スメール文字やエヂプト文字、漢字など、本当の文字を“表意文字”と名付け、自分たちの「仮借に過ぎない」ローマ字を“表音文字”と称し、「表意対表音」といふ形で文字を扱って来た。然し、これは自分たちの使ってゐるローマ字を美化しようとするための謀略である。

私が「謀略だ」と言ふのには、それだけの理由がある。すでに度々述べてゐるやうに、“文字”は「発生するや否や消滅してしまふ“言葉”を保存するために創作」したものである。だから、創作された文字は、(スメール文字でもエヂプト文字でも漢字でも)皆、一つ一つ言葉に対応して作られてゐる。言葉を一語一語直接に表したものであるから、“表語文字”と称すべきであって、“表意文字”と呼ぶのは明らかに不当である。

“表語文字”は、言葉の意味だけでなく、その発音をも当然の事ながら表してゐる文字なのである。つまり、表意兼表音文字なのである。それなのにこれを“表意文字”と呼ぶことは、この文字に表意だけ出来て表音は出来ない文字だといふ誤解を生み易い。西欧の学者たちはそこをねらって“表意文字”と命名したのである。

自分たちの使ふローマ字は、音しか表せない文字であるから、これは“表音文字”としか言ひやうがない。そこで、表語文字を“表意文字”と呼べば、「片や表音の表音文字、片や表意の表意文字」といふことで、対等に並ぶことが出来る。これはどうしても謀略であるとしか言ひやうがない。

およそ、自分に関はるものはすべて美化したいのは人情であるが、それは特に西欧の人々に強い。日本人はむしろ謙遜し卑下するのが普通であるから、かういふ西欧の

考へ方は理解し難いかも知れない。

例へば、フランス人は、フランス語ほど優美な言葉は世界のどこにも無いと自負してゐる。アナトール・フランスは、「フランス語の“笑ふ”といふ言葉は、よその国の“笑ふ”といふ言葉とは違ふ」と言って母国語を礼賛してゐる。

また、ドイツ人はドイツ人で、「ドイツ語ほど明快で、論理的に明晰な表現の出来る言葉は他に無い」と言ってゐるし、ロシヤ人は「ロシヤ語ほど文学的に豊かな表現力を有った言葉は他に無い」と言ってゐる。

また、イタリヤ人は「イタリヤ語ほど音楽的で優美な発音を有った言葉は他に無い」と言って誇り、イギリス人は「世界的に共通語としての実績を有つ英語」について限りない誇りを懐いてゐるのである。

かういふ事が平気で言へる彼らだから、自分たちの使ってゐるローマ字が、「表語文字の発音だけを借りた欠陥文字」であるとは、認めたくないに決ってゐる。いや、世界一優れた文字だと誇りたいに決ってゐる。そこで、欠陥文字であるローマ字を「世界一の文字」に仕立てるために大変な努力を払ってゐるのであるが、その辛苦のあとをお見せしたいと思ふ。

## ■表意文字といふ名称について

ここでは岩波新書『文字の歴史』から引用することにする。イギリスのムーア・ハウスの著で、ねず・まさし氏の訳である(訳文は現代かなづかひ)。

この本に依れば、「文字は、言葉とは別に発生したもの」となってゐて、だから、「文字と言葉との間には何の連鎖も存在しなかった」と書かれてゐる。

つまり、ムーア・ハウスの考へは、「文字は、言葉ではなくて、物そのもの、事そのものを直接表すものとして作られた」と言ってゐるのである。かうすれば、“表語文字”ではなくて“表意文字”と呼ぶ理窟が成り立つわけである。

然し、この説明は現実を無視した、単なる理窟に過ぎない。仮に「文字が、物そのもの、事そのものを直接表すために作られた」としても、それが文字として通用するためには、それが何を意味する符号であるか、といふ人々の共通理解を得る必要がある。

その共通理解を可能にするものは、何と言っても言葉であらう。例へば、“山”といふ漢字が“山”そのものを直接表した文字として作られたとしても、それが“山”を意味する符号であることの共通理解を得るためには、「これは“山”を表した符号ですよ」と、“やま”といふ言葉を使って理解してもらふのが最も手っ取り早く、最も確かな方法である。“やま”といふ言葉を使はないで、“山”といふ字をどうして教へるのか、ムーア・ハウスにやってみてもらいたいものである。

“やま”といふ言葉が無いのなら仕方がないが、言葉はそれよりもずっと遠い昔から存在してゐるのである。だから、言葉を使はないはずがないと思ふのだが、ムーア・ハウスは「文字と言葉との間には何の連鎖もなかった」と言ひ切ってゐるのである。

では、ムーア・ハウスはなぜこのやうに無理な考へ方を強行したのであらうか。それは勿論、「文字が初めから言葉を表したものである」と認めたら、「文字は初めから意味をも発音をも表してゐた」と認めなければならなくなるからである。

さうなれば、“表意兼表音文字”が単なる“表音文字”になることは、「進歩である」とはとても主張することが出来なくなる。どうしても「言葉と関係なく作られた」として“表意文字”の名を与へ、「表意文字が表音文字になることこそ進歩である」と主張

したかったのである。

## ■表音文字の発生

ムーア・ハウスは、表音文字の誕生を次のやうに説明してゐる。「一つの物体が示されると、例へば一本の木は二つの方法で表現することができた。第一は文字、すなはち木の絵文字によって、第二は、言語すなはち(英語の tree ツリーのやうに)木に対応する話し言葉によって示される。しばらくの間、この二つの表現形式が用ひられたが、(この表現に御注意頂きたい。文字の“木”は、言葉の“木”を表したものだと私は思ふのだが、ムーア・ハウスは、文字の“木”も、言葉の“木”も、共に“木”その物を表したのだと言ってゐるのである)その後、絵文字は、木といふ自然物を意味するだけでなく tree といふ言葉を口にした時の音(おん)をもあらはす、といふ考へがあらはれた。かうなると、内容からいって tree といふ物体には無関係なところで tree といふ言葉をはなす時に発する音をあらはす(何を言ってゐるのか解らないといふ方のために、こんな言ひ方をしたらお解りになるだらうか。『tree といふ文字を“木”といふ意味を表したものとせず、tree といふ発音を表した文字として使ふ』)ために、絵文字を用ひることが可能になった。

そこで、『わなにかける』『trepan ツレパンといふ考へを示すやうな記号をつくりたかった場合を仮定してみたまへ。(これは一つの絵文字、または表意文字によるかぎり、即座にできはしなかったらう)、“木”を表す文字 tree と、“鍋”を表す文字 pan とを一つに合せて、それには、tree といふ絵文字と pan(パン)鍋といふ絵文字とが一つに合して、その言葉の音を読み手に与へて、はじめて先の要求に応じたのであらう。この種の記号は、音をあらはすために、音標文字(フォノグラム)とよばれ、これを用ひる書き方を表音式(フォネチック)といふ」

と。

これを読めば、ムーア・ハウスは、「木を表した文字も、木を表した言葉も、木その物をそれぞれ直接に表したものであるから、文字と言葉の間には何の関係も無かった」と言ってゐることが解る。「文字はもともと表意的なものであり、表音的なものである言葉とは無関係だった」と言ふのである。

ところが、“そのうちに”文字が“音をも表す”といふ考へが現れた」と言ってゐる。これによって、「もともと音を有たなかった文字が“音をも表す”といふことは、文字の進歩である」といふ理論を展開させ、表音文字なるものを文字使用の過程で発展的に生じたものだと評価してゐるのである。

然し、この用法は、紛れもなく、漢字における“仮借”と全く同じものである。ただ、異ってゐる点は、漢字においては、「文字は消える言葉を保存するために創作したものであるから、初めから言葉を表したものであるとして、“意味”と“発音”との両者を兼ね備へてゐた」と考へられて居り、“仮借”は「文字の有つ意味に関係なく、発音だけを借りる用法であるから、文字通り“仮りに借りる”便法である」としてゐることである。

## ■“仮借”は“仮の借物”

中国では、“仮借”がどんな場合に用ひられたかと言ふと、第一には、ある言葉がどうしても文字に表すことが出来ない場合である。例へば、数字の“十”がこれである。

“十”といふ字は、元は“針”の形（針に糸を通した形だと思ったらよい）を表した“象形文字”で、本来は“針”といふ意味の字であった。ところが、“針”といふ言葉と、数の

“十”といふ言葉とがたまたま同じ発音であったことから、“針”といふ言葉を表した“十”といふ字を借りて、数の“十”を表すことにしたものである。

では、なぜ数の“十”は他の字を借りたかと言ふと、数の“十”を表す字がどうしても作れなかったからである。“一”や“二”のやうには簡単に作れないからである。然し、作れないからと言ってそれで済ませるわけには行かないので、同じ発音、もしくは似た発音を借りて間に合せようといふことになって“十”を借りたのである。

ところで、「廂（ひさし）を貸して母屋（おもや）を取られる」といふ諺（ことわざ）があるが、漢字にはかういふ例が実に多い。借りる方はどうも仕方が無くて借りたのだから、共用の煩はしさは初めから承知であるが、貸した方は煩はしくなると、その字を気前よく借り手に明け渡してやって、自分は別の字を作ってそれに移り換るといふわけである。

今まで“十”と見れば即座に“はり”と読めたものが、仮借されると“はり”かな、それとも“数の十”かな」と考へて区別しなくてはならなくなるのだから、“はり”にとっては迷惑なわけである。

そこで、“はり”は気前よく“十”を“数”に明け渡してやり、“はり”の材料の“金”を“十”に付け加へて“針”といふ新しい字を作り、これを“はり”専用の字としたわけである。

“釘”といふ字も、母屋を明け渡して出て行った先の字である。“丁”が“くぎ”の形を表してゐて、これが“くぎ”の本字だったのであるが、“くぎ”を“一丁”“二丁”と数へたところから、「物を数へる時に使ふ言葉」になり、専らその意味に使はれるやうになると、その方に“丁”を明け渡し、“針”と同じやうに、材料の“金”を加へて“釘”といふ字を作ったのである。

ついでに言ふと、“源”も“原”が本字である。“原”といふ字は、崖を表した“厂（げん）”に

“泉”といふ字を加へて、泉の湧き出る所(水源地)を表した字である。“高原”といふ意味に使はれるやうになったため、これは水の意味の“氵”を加へて“源”としたものである。然し、この字は“原始”“原子”など、元の意味にも使はれてゐる。

## ■“工”といふ漢字

“仮借”が文字通り「仮の借物」であることは十分に説明できてゐるやうに思ふけれども、念のため、もう一つもっとはっきりした例を紹介したい。

“工”といふ漢字である。この字は、“定規”の形を表した字で、“物差し”が本義の字である。今は実際には「物差しを使って“物を作ること”(工作)」や「物差しを使って“物を作る人”(大工)」といふ意味に使はれてゐる。

今は「物をうまく作ること」を“巧”、「物を作り上げること」を“功”、「物を一心に作ること」を“攻”といふ字で表してゐるけれども、これらの字の発音は皆“工”と同じであるから、同じ言葉であったことが判る。

従って、今の“巧”“功”“攻”といふ字は、昔は無くて、“工”で書き表してゐたはずである。ところが、同じ「物を作る」といふ言葉であっても、「どのやうに作るか」によって、「うまく作る」のは“巧”、「一心に作る」のは“攻”「立派に作り上げる」のは“功”といふやうに、別の文字を作ってこれを表現したといふことは、「思想(意味)が本体で、発音は容器」であることを証明したものであって、「文字はただ発音さへ表せばそれで良い」といふ西欧の学者の意見がいかに低級なものであるか、よく理解できるであらう。

言葉は音声によって意思を伝達するものであるが、音声は手段であって、目的は意思の伝達に在る。だから、言葉を視覚化した文字も、表音は手段であって、目的は意

思の伝達に在ることは当然である。

だから、本当の文字は、“巧”“功”“攻”のやうに、言葉としては“工”の一字で十分に表現できてゐるのに、言葉では表現できない所まで表現することに努めるものなのである。“表音”は最低の条件であって、それより高い所を求めてゐるのである。

この事実を見たら、「表音化が文字の進歩なのである」といふ西欧の学者たちの主張がいかに間違って居り、欺瞞に満ちたものであるか、よく解って頂けると思ふ。

## ■最初の表音文字

先に、「たいていの民族は、自分の力では文字を創作することが出来ないので、先進民族の既製の文字を借りて済ませた。その用法が“仮借”であり、換言すれば“表音的用法(フォネチック)”である」と述べたが、これが「表音文字の誕生」といふ事なのである。

「最初の表音文字」は、今から五千年ほど昔、アッカード人がスメール文字を借りて、アッカード語を表した時に誕生した。続いて、スメールの周辺に住む民族たちは、恐らく次々にその文字を借りて自分たちの言葉を表さうとして、これを“表音文字”として使ったことだらうと考へられるが、これが遠くにまではなかなか及ばかかったと思ふ。

これが広く世界に広まるやうになったのは、それから二千年も経った紀元前一〇〇〇年頃、地中海を舞台に広く海外貿易に従事してゐたフェニキヤ人の力に依るものが大きい。その足跡は、その頃すでに地中海に遍く、遠くはスペインにまで及んでゐたことが、今では明らかになってゐる。

さて、西欧の“表音文字”は、普通、アルファベットといふ風に呼んでゐるけれども、これは、Aをギリシャ語で“アルファ”Bを“ベーター”と発音してゐたので、この二字を合せて“アルファ・ベーター”と呼んだことに由来する。それは、わが国において、“かな文字”のことを“いろは”と呼んだのと同じことである。

然し、アルファベットの源流を求めると、先に述べたやうにアッカードに至るのである。アッカード人は、Aを“アレフ”、Bを“ベート”と発音してゐたことが、今では明らかにされてゐる。

さうすると、アッカード人のアルファベット（実は“アレフ・ベート”）が、フェニキヤ人の手を経てギリシャに渡り、こで“アルファ・ベーター”と呼ばれ、今のアルファベットの名称が成立したものであらう。

## ■アッカード人の快挙

さて、アッカード人は、スメール文字を“仮借”してアッカード語を表記してゐたのであるが、間もなくこの“表音的用法”では飽き足らなく思ふやうにたったものである。彼らは、生活が安定して居り、高い文化を有ってゐたからであらう。

彼らはとに角、スメール文字の全休に精通してゐたやうに思はれる。といふわけは、スメール文字の一字一字をアッカード語に翻訳し、スメール文字をアッカード語を表す“表語文字”にしてしまったのである。

初めは、「スメール文字のもつ“意味”を捨て、“発音”だけを借りる」仮借の用法を行ってゐたのであるが、その反対に、「スメール文字のもつ“発音”を捨て、“意味”の方を借りる」といふ用法を採ったのである。

例へば、“A”といふ字は、スメール文字においては“𒀀”といふ形で、角を生やした“牛の頭”の形を表した象形文字であって、“牛”といふ意味の言葉を表した“表語文字”であった。（ただし、“牛”のことをスメール語で何と言ったかはまだ解ってゐない。従って、“𒀀”が何と発音されてゐたかは解らない）

さて、アッカード人は、スメール文字のもつ“意味”を借りて、“𒀀”をアッカード語の“牛”を表す文字にした。それで、これをアッカード語で読むことになったのであるが、アッカード語では“牛”のことを“アレフ”と言ったので、“”は“アレフ”と読まれる字になったのである。

“B”といふ字は、スメール文字においては“𒁀”といふ形をしてゐて、彼らの住む家の形を表した象形文字であって、“家”といふ意味の言葉を表した“表語文字”であった。（この字がスメール語で何と読まれてゐたか、スメール語で“家”のことを何と言ったかはまだ解らない）

アッカード人は、“𒁀”が“家”といふ意味の文字であることを理解すると、この文字も、アッカード語の“家”といふ言葉を表す文字にしてしまった。アッカード語では“家”のことを“ベート”と言ったので、“𒁀”といふ文字は“ベート”と読まれることになったのである。

このやうにして、アッカード人は、スメール文字を一字一字その意味を調べ上げ、スメール文字をアッカード語を表す“表語文字”にしてしまったのである。

先にも述べたやうに、“仮借”の場合には二、三十字も借りれば足りるが、この“表語文字”を作るのには、少なくとも二、三千字は必要であり、それは「全く新しい文字を創作すること」とほとんど変らない大事業であったに違ひないと思はれる。

それに興味深いことには、アッカード語はセム系の言語であるが、スメール語は日本

語と同じウラル・アルタイ系の膠着語らしいことが判ってゐることである。然し、これには、未知の部分が非常に多い。このやうに言語の本質に違ひのある文字をアッカード人がどのやうにしてアッカード語を表す文字にして行ったか、今後のこの面の研究に期待するものは大きい。

よその文字を借りてこれを自国語の“表語文字”に作り変へてしまふことは「全く新しい文字を創作するのに劣らない大事業である」と言ったが、事実、この大事業を成した民族は、この広い世界で、この長い人類の歴史の中で、紀元前三千年のアッカード人と、七、八世紀における日本人と、ただこの二件しかないことで解る。文字を創作した民族は、スメール人、エヂプト人、インド人、中国人とあるのに、こちらはアッカード人と日本人とだけである。「創作するのに劣らない」どころか創作するよりも難しい」と言ってもよいのではないだらうか。

## ■ローマ字の歴史

現在、西欧諸国語の大部分は、ローマ字アルファベットによって表記されてゐる。この文字は“ラテン文字”とも呼ばれるが、そのことからも知れるやうに、ラテン語を表すために作られた表音文字なのである。ラテン語は、ローマ帝国の公用語であったから、それを表記するラテン文字は、ローマ字とも呼ばれるやうになったものである。

先に、ローマ字アルファベットの源流はスメール文字であると述べたが、最も近い源流はギリシャ文字である。そのギリシャ文字はフェニキヤ文字に由来する。

そのフェニキヤ文字がスメール文字に由来することについては、先にすでに述べた所であるが、これは正確に言ふと、スメール文字と言ふよりも、むしろアッカード文字と言ふべきであるかも知れない。

なぜかと言ふと、アッカード文字はスメール文字を借りたものではあるが、それは“表語文字”として借りたものであるから、フェニキヤ人が借りたのは、スメール語を表したスメール文字ではなくて、アッカード語を表したスメール文字だったからである。アッカード語を表したものは、元はスメール文字であってもアッカード文字と言ふのが本当だと思ふ。

そこで、“表語文字”であるアッカード文字から、どのやうにして“表音文字”が作られたか、その過程を一、二の例によって調べてみることにしたい。

“A”はスメールで初めて作られた文字であるが、アッカード人によって、“牛”といふ意味で“アレフ”といふ発音のアッカード語を表す“表語文字”に変へられた、といふ事はすでに述べた通りである。

この“A”を、フェニキヤ人が、“牛”といふ意味を捨てて、単に、アレフの“ア”といふ音韻を表す文字としてこれを取り入れたのである。この「頭韻を借りる」といふのが仮借の場合、最も普通の方法であって、だからわが国でも、“安”といふ漢字を借りて、その頭韻である“ア(アンのア)”といふ音韻を表す文字としたのである。

同じやうに、“B”は“家”といふ意味で、ベートといふ発音のアッカード語であったが、フェニキヤ人は“家”といふ意味を捨てて、ベートの“b”といふ音韻(頭韻)を表す文字として取入れたのである。

このやうにして、フェニキヤ人は、自分たちの言葉が有ってゐる音韻を全部表せるだけアッカード文字を取入れたのである。この“フェニキヤ・アルファベット”は、僅かに“二十二字”に過ぎなかったけれども、これでフェニキヤのどんな言葉でも書き表すことが出来たのである。(僅かに二十二字と言ったが、日本語は十九字のローマ字アルファベットだけでどんな言葉でも書き表すことが出来る)

さて、ギリシャ・アルファベットは、このフェニキヤ文字を借りたものであるが、この時、自分たちの言葉を表すのに必要な五つの文字を新たに作って入れ、その反対に、自分たちの言葉には必要のない三つの文字を削り、差引き“二十四字”とした。

現代の花形であるローマ字アルファベットは、このギリシャ文字を借りたものであるが、借りるに当っては、やはり自分たちの言葉に合せて、足りないものは作り、余分な文字は削って、現在行はれてゐるやうに“二十六字”としたものである。

## ■ローマ字の欠陥

表音文字が“仮の借物”であって、「文字を創作するだけの力を有たない民族が、先進民族の文字を借りる時に行はれる“最も手軽な用法”である」といふことはすでに述べた所であるが、中でも、英語やドイツ語、フランス語におけるローマ字アルファベットほど欠陥の多い文字は、他に少ないと思ふ。

西欧の学者たちが、いかに自分たちの使ってゐる文字だとは言へ、このやうに欠陥の多い文字を優れた文字だと言ひ張るのには、よほどの厚顔無恥でなければ出来ない事だと、私には思はれるのである。

同じ表音文字であっても、わが国の“かな”は実に完璧だと言ってよい。日本語の有つ音韻を網羅してゐて、しかも余分な文字は一字もない。アルファベットにしても、フェニキヤ時代には今よりも少ない二十二字だったけれども、表音文字としては完璧であった。

フェニキヤのアルファベットは、三つの母韻と十九の子韻符号しか無かったけれども、それは彼らの言語に必要な表音文字を選んで借りたからであって、この二十二字でどん

なフェニキヤ語でも立派に書き表すことが出来たのである。

然し、今のローマ字アルファベットでは、英語でもドイツ語でもフランス語でも、彼らの有つ音韻の数に比べたら、ひどく足りない。母韻の数はいづれも十個以上あると言ふのに、母韻を表した文字は僅か五つしか無い。（それはラテン語には母韻が五つしか無かったからである。日本語も母韻が五つなので、ローマ字は日本語を表すためには完璧だとは実に皮肉なことである）

このやうに文字がひどく足りないかと思ふと、その反対に、不要な文字がいくつかあるのである。“c”や“x”がこれである。“c”は今、固有の音価を有たない。“s”か“k”か、どちらかの音を受持つ。表音文字としては、“s”と“k”とあれば“c”は不要である。いや、不要と言ふよりも、“c”を使ふと“s”と発音するのか“k”と発音するのか迷はせるので有害である。

“x”は“ks”といふ二つの音韻を複合した音価を有った文字である。二字に当るものを一字で表現できることには、それなりの便利さは勿論ある。然し、その考へ方を認めるなら、“ps”でも“bs”でも、複合出来るものはいくらでもあるではないか。（ギリシャ文字には“ps”があった）“ks”だけが必要だといふ理由は無いであらう。

言ふまでもなく、“c”でも“x”でも、ラテン語を表すのには必要だった。今、私が言ひたいのは、フェニキヤにおいても、ギリシャやローマにおいても、音韻文字を借り入れるに当っては、必要なものだけを借り、不必要なものは借りなかった。そして、必要なのに無いものについては自分で作り新たにそれを組入れた。

ところが、イギリスやフランスやドイツなどの西欧諸国がローマ字アルファベットを取入れるに当っては、さういふ努力を全くせずに、そのままそっくり取入れた、その努力の無さ、無能さを指摘したいのである。

（と言って非難はしたが、実は無能でローマ字をそのままそっくり取入れたのではない事は私は百も承知である。それは「伝統を重んじた」からである。そのお蔭で、英・独・仏の言葉が互ひにあれだけ違ってゐても、同じ源泉のラテン文化を享受することが出来、それが相互の理解を可能にしてゐるのである。例へば、アルバムの事を英語ではアルバム、仏語ではアルボム、独語ではアルブムと言ふけれども、綴りは“album”で同じであるから言葉の隔絶を防ぐことが出来てゐるのである。それは、発音に関はらず“album”といふ古い伝統のある綴りを守ってゐるためである。もしも、発音を重視したら、古典であるラテン語とは途絶し、各国語間の隔絶はいよいよひどくなるであらう。だから、「ローマ字アルファベットをそのままそっくり取入れた」ことは“無能”だったからではなくて“賢明”だったからである。

然るに、西欧の言語学者たちは「文字は表意よりも表音が大切だ」とし、伝統の重要性を否定するから、それでは「ローマ字アルファベットをそのままそっくり取入れるのは無能だ」と言ふのである）

## ■表音文字の表意化

ローマ字は、文字そのものとしてはこのやうに欠陥の多い文字であるが、長い年代に亘って使用してゐると、その欠陥がむしろ長所に変って行くものである。それが“伝統”といふものであり“伝統”を重んじなければいけない理由はそこにある。

表音文字は容器に過ぎないけれども、長い間使用してゐれば、自然と中身が着いて来るのである。綴りの固りが、長い年月の間に、独特の形象を形作って視覚に訴へるやうになるので、“表語文字”のやうな効果を発揮するのである。

例へば、次の例を御覧頂きたい。

cite　cent　so　saw
site　sent　sow　soar
sight　scent　sew　sore

ここに挙げた四組の三語づつの言葉は、それぞれ綴りは異ってゐるけれども、発音は全く同じ言葉である。発音は同じでも、その綴りが互ひに異ってゐて、それぞれに独特の形象を形作ってゐるので、一見してその発音と意味とが瞬時に理解できるのである。これが同じ綴りであったら、読めても意味は直には理解できないであらう。

だから、表音文字でも、長い年代に亙ってその綴りを固く守り続けてゐるならば、かなり、“表語文字”に近い効果を有つ文字になるものだといふことが解る。

英語やフランス語の綴りは、著しくその発音からかけ離れてゐるけれども、そのお蔭で解り易くなってゐるのである。だから、その綴りを大切に保持して来たのである。決して不便を忍んでさうして来たのではない。

ところが、学者といふものは実にひねくれた見方をするもので、「言葉の発音から離れた綴り」は“表音文字の堕落”であると言ってこれを憎んでゐるのである。「表音文字は、音声を忠実に表してゐてこそ“表音文字”である。音声を忠実に表さない綴りなど怪しからぬ」と言ふわけである。

「表音文字は音声を表すための文字であるから、言葉の表記はいつもその言葉の発音を正しく表すやうに努力すべきである。言葉は長い年月の間には変化して行くものであるから、その変化に応じて、綴りを改め、いつもその発音を正しく表す綴りにして置くべきである」といふのが彼らの考へ方なのである。

だから、かのムーア・ハウスは次のやうに言ってゐる。

「英語の綴りを学ぶことが、中国語におとらずむつかしくなってしまふ。そのくらゐなら改革する方がよいのに決ってゐる」と。

ムーア・ハウスはまたこんな事も言ってゐる。

「その治療法は、我々の綴りを発音通りにすることによって改革することである。然し、言ふは易く、行ふは難し。綴りの改革の問題ほど、特に歴史的背景に無智な人々の間では、激怒を買ふ問題は他に無い」と。

彼は「無智な人々が綴り改革に反対し、激怒する」と言ってゐるけれども、「さう言ふ彼の方がよっぽど無智である」と私は思ふ。伝統のある綴りを「改革する方がよいに決ってゐる」と言ふ者が賢明であるはずがない。

## ■one といふ綴り

伝統のある綴りを守ることがいかに大切なことであり、価値のあることであるかを、一つの言葉の綴りの歴史をたどることによって考へてみることにしたい。

そこで、英語の“one”を取上げることにしたい。この言葉の発音は、今は〔wan〕であるが、『オクスフォード語源辞典』に拠ると、十六世紀には、〔ouni:〕といふ発音であることが解る。

“o(ou), n, e(i)”といふ綴りを文字通り発音すれば〔ouni:〕となるから、“one”といふ綴りは十六世紀における“一つ”といふ意味の言葉である〔ouni:〕の発音を忠実に表したものであることが解る。

御承知のやうに、英語では、綴りの末尾にある“e”は今は全く発音されない文字に

なってゐる。だから、“one”の“e”も発音されなくなって〔oun〕と発音されるやうになった。この〔oun〕といふ言葉は、力強く発音すると、自然に〔woun〕といふ発音になる。現在の〔wan〕といふ発音は、この〔woun〕の変化したものである。

このやうに、“one”といふ言葉は、十六世紀以来、五百年の間に驚くほどの変化をして来たことが解る。然し、それにも関はらず、その綴りは少しも変化してゐない。その理由は一体どこにあるのか、考へてみたいと思ふ。

もしも表音文字が「音を表すのが目的の文字」であるとするならば、言葉の発音が変化したらその時点でその変化に応じた綴りに改めるはずである。ところが、〔ouni:〕といふ言葉は〔oun〕に変り、〔woun〕と変り、wan〕と変っても、その綴りは、初めの“one”といふ綴りを変へなかった。この事実は、「表音文字は決して音を表すことを目的とするものではない」こと、少なくとも、「音を表すことはそれほど重要なことではない」といふ事を意味してゐる。

もっとはっきり言ふならば、「表音文字は、“表音”といふ手段により、“思想伝達”の目的を果さうとして生れたものである」といふことである。“表音文字”とは言へ、文字といふものは“表意性”の方が“表音性”より大切なのである。だから、綴りを変へて発音を忠実に表しても、そのために“表意性”が損はれたら何にもならなくなる。だから、綴りを変へなかったのである。

## ■伝統的な綴り

ムーア・ハウスは、『文字の歴史』の中で「伝統的な綴りを発音通りに改めるべきだが、無智な人々の激怒を買ふので実行は難しい」と述べたあとで、「伝統的な綴りを廃止し

て表音的な綴りを採用することは、アメリカで実現される気配が一番強い。書法の伝統がそれほど重くのしかかってゐないからである」と述べてゐる。

それは、昭和二十一年の事であり、わが国か「伝統的かなづかひを廃止して、表音的な“現代かなづかい”を採用した年」であった。然し、それから僅か十年後には、ムーア・ハウスが「伝統的な綴りが廃止される可能性が最も高い」と期待したアメリカにおいて、ノアム・チョムスキーから、「今まで言語学者の九九パーセントが、伝統的な綴りを改めて発音通りの綴りを採用すべきだと主張して来たが、そんな事をしたら大変だった。伝統的な綴りは、文章を理解しようとする人のためにあるものであるが、発音的な綴りは、意味を理解しようがしまいが、聞いた事をただ再生するためにある」と言ふまでに、徹底的な批判を受けたのは何とも皮肉な事であった。

“one”といふ綴りが、その発音の度々の変化にも関はらず、五百年もの長い年月に亙って保持されて来たので、それが“表語文字”的な効果を発揮し、読み難い表音文字を読み易くしてゐたのである。こんな解り切った事が、チョムスキー以前の言語学者たちには理解できなかったのである。

## ■言葉や文字の正しさ

昔は、“黒板”は黒かったものである。だから、“黒板”と名付けたのである。然しながら、今の黒板はたいてい“深緑色”をしてゐる。それでも、やはり“黒板”と呼んで、決して“緑板”とは誰も言はない。

「緑色をしてゐるのに“黒板”と言ふのは変ではないか。これからは“緑板”にしよう」と主張する人があったとしても、これに賛成する人などゐないであらう。

また、“白墨”といふ言葉がある。この言葉などは、初めから不合理な言葉だった。なぜなら、“墨”といふ字は、その字が示すやうに、“黒い”煤と粘土とを混ぜて作ったもので、“黒い”物に決ってゐるからである。それなのに、墨と同じやうな形をしてゐて書く時に使ふ物だといふので、色が“白い”から“白墨”と名付けたものである。

「白くて黒い物」といふ事になるが、言葉は理窟などどうでも良いのである。解りが良い事の方がずっと大事なのである。だから、白墨の色が赤ければ「赤い白墨」と言って、決して“赤墨”とは言はない。私は、言葉のこの不合理さに何とも言へない面白さを感ずる。

“一”といふ字は、恐らく世界中が“一本の棒”でこれを表してゐるだらうと思ふ。漢字でもローマ字でもアラビヤ数字でも皆さうである。然し、漢字ではこれを。“一”と横に書き、ローマ字では縦に“1”と書く。アラビヤ数字ではたいてい“/”と斜めに書く。

なぜさう書くのだらうか。理由は唯一つ、「今までさう書いて来たからさう書く」のである。そのほかに何の理由があらうか。“1”を一本の棒で表すといふことには理由があるが、これを横に書くか縦に書くかといふ事には、さうしなければならないといふ理由は無いであらう。私たちは今までの習俗、伝統に従って書くだけである。

言葉や文字においては、この“習慣”“伝統”が大事なのである。習慣や伝統のお蔭で言葉や文字はその生命を保ってゐるのであって、習慣・伝統を無視したらおしまひである。一片の理窟や理論でこれを左右してはならないことを、私は“黒板”や“白墨”に見るものである。

「私たちの祖先の感情の脈打ってゐる言葉だけが、自分の思想を十分に表現できる」と言ったアナトール・フランスの言葉には、私も全く同感である。